

令和 6 年度

一 般 選 抜 (I 期) 問 題

試験日 2月2日

国 語

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

注 意 事 項

- ① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- ② 開始の合図後、解答用紙に「氏名」、「個人番号」を記入すること。
- ③ 受験票、筆記用具以外は、机の上に置かないこと。
- ④ 受験票は机の上に貼付してある「個人番号」の手前に置くこと。
- ⑤ 記述解答で、字数の指定がある問題では句読点は1字として数えること。
- ⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- ⑦ 試験中は退席しないこと。(気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること)
- ⑧ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

小学校一年生の教科書から、今使っている教科書までを思い出してみてください。学年が上がるにつれ、教科書にのっている絵の数が減り、その分、字が増えているでしょう。〔ア〕出てくる問題はむずかしくなっています。今なら小学校の算数の問題はなんなく解けるはずです。

学年が上がると、もっとフクザツでむずかしいことを勉強するようになる。このような学年を単位とした学校生活を通じて、生徒たちはどんな隠れたカリキュラムを学んでいるのでしょうか。

〔イ〕以前はできなかったことでも、時間とともにできるようになる。進級という学年の変化を経験することを通じて、年齢とともに、以前より成長したという感じ——つまり時間がたつほど、だんだんよくなっていくのだという感覚をもつようになります。〔ウ〕

クラス編成は、学年を単位に行われます。〔エ〕授業を受けているのは、みんな同じ学年の生徒たち。同じ年齢の生徒たちがいっしょに授業を受けます。〔オ〕授業だけではなく、給食を食べるのも、そうじをするのも、たいていは同じ年齢の生徒たちです。

クラブ活動をやっている人なら、先輩―後輩の関係を経験するでしょう。たった一年しか変わらないのに、部活では先輩と後輩とで立場がずいぶん違います。上級生に対してきちんとあいさつをする。道具のあとかたづけやグラウンドの整備などは後輩がやる。そういうクラブもあるでしょう。

このように、学校では学年という単位で集団がつけられる場面が少なくありません。たった一、二年の違いでも、上級生と下級生の関係は、同級生同士の関係とは違います。年齢によって、人とのつきあい方をどのように変えていくのか。学年という年齢集団を基本にした学校生活を通じて、発達という感覚や、年齢による人とのつきあい方の違いとい

うことを学んでいくのです。

年齢による区別——これも学校が教える隠れたカリキュラムの一つです。

つぎに、ましこひでのりさんの研究『イデオロギーとしての「日本」』（三元社）を参考に、⁽¹⁾ 社会科学や国語の授業に、どんな「隠れたカリキュラム」が含まれているのかを考えてみましょう。

まずは、社会科学の地理です。地理の時間には、北は北海道から南は沖縄までを対象に、現在の「国境」で囲まれた日本という地域について学習します。その結果、どこからどこまでが日本という国なのかを学びます。ちよつとむずかしい言葉を使えば、空間としての連続性、つまり、場所としてどこからどこまでが日本という国のリョウドであるのか、そのつながりを前提として、日本の地理を学ぶのです。

歴史であれば、これもまた日本というひとつのまとまりをもった地域を対象に、石器時代、縄文時代から始まり現代まで、日本という国の歴史を学びます。この場合にも、ずうつと昔から今まで、日本という国がひとつのまとまりとして引き続き連続してあったこと（むずかしくいえば、時間的な連続性）を前提に歴史の学習が行われます。

このような学習を通じて、私たちは、日本という国がひとつのまとまった単位として、ずつと昔からあったと思うようになるでしょう。ところが、明治維新以前には、たいていの人は、自分が日本人であるよりも、長州（現在の山口県西北部）人とか、薩摩（現在の鹿児島県西部）人であるというように、それぞれのハン（地方）の人間だということ意識が強かったのです。沖縄やアイヌの人たちのように、かつては日本という国のまとまりの外側で暮らしていた人もいました。

今では、日本国籍をもって、この日本列島に住んでいるかぎり、私たちは自分が日本人であることを疑いません。日本という国のまとまりがあること、その国民であることになんの疑問ももたずに暮らしています。でも日本人であることを、どうやって学んでいるのでしょうか。

つぎは、国語について考えてみましょう。これも、ましこさんの研究を参考にしています。

国語の時間に日本語の勉強をするのは、日本語こそ、日本という国の言葉であると見なされており、しかも日本に住んでいる子どもならだれでも、大人になるまでにこの言葉を使えるようになる必要があると考えられているからです。しかし、日本語といっても、地域によってアクセントや使う単語に^(d)トクチョウウがあります。東北地方で使われる言葉と、関西や九州、沖縄で使われている言葉では、違いがあります。ところが、国語の時間に勉強する日本語は、このような違いをこえた「標準語」・「共通語」と考えられています。

国語の教科書を声を出して読んでみると、同じ文章でも、地方によるアクセントの違いがわかるはずです。それでも、日本語という一つの言葉がある。それを前提に、私たちは国語を学びます。

つまり、国語の時間を通じて、日本語というひとまとまりの言葉があること、そして、日本語という共通の言葉を読み、書き、話す私たちは、日本という国の一員として同じであることを、学んでいるのです。

このようにみると、国語にしても、地理や歴史にしても、言葉のルールを学んだり、地域の特性や、昔のできごとについて学ぶだけではなく、日本という国のまとまりがあることや、私たちが日本という国の一員であることを教えているのです。江戸時代まで、ほとんどの人は、自分が日本人であるという意識をそれほど強くもっていませんでした。それに比べれば、今の私たちは、日本人であることを疑いなく受け入れています。日本中の中学校で、だれもが同じことを勉強する。こうして、日本人というまとまりが強まっていくのです。これも、隠れたカリキュラムの一つです。

これまで、いろいろな種類の隠れたカリキュラムについて説明をしてきました。学校では、数学の方程式や英語の関係代名詞などのように、「この知識を教えよう」とはつきり示していないのに、ふだんのなげない生活を通じて、生徒に伝えられることがたくさんある。さまざまなルールや、ものの見方・考え方、人とのつきあい方、日本という国のまとまりや、日本人であるといった意識など、いろいろなことがらが、学校では生徒たちに教えられています。

でも、どうしてもこのような隠れたカリキュラムが、学校生活の中に入り込むのでしょうか。最後に、この問題を考えたいことにしましょう。

この問題を考えるために、隠れたカリキュラムを大きく二つに分けてみましょう。一つのタイプは、学校生活をスムーズに行うために入り込んでくる隠れたカリキュラムです。これは、すでに述べたように、授業などをきちんと行うために必要とされるいろいろなルールのことです。時間を守ることも、コミュニケーションのルールも、一人で勉強するのではなく、集団で勉強するときに必要な約束事です。

もうひとつのタイプは、もともと自然に、知らず知らずのうちに学校生活に入り込んでいる隠れたカリキュラムです。男女の区別や、年齢による区別といったことは、それが特別に問題とされないかぎり、「あたりまえ」のこととして学校の中でも使われる区別であり、約束事です。学校以外のところでも、なにげなく使われる区別が、そのまま学校でも使われるのです。

日本人や日本という国についての意識も同じです。日本という国がすでにまとまりをもっていることや、私たちが日本人であるという意識があたりまえになっている現在では、日本という国のまとまりを前提に教育が行われるのも不思議ではありません。あたりまえと思われているからこそ、自然と学校の中にも入ってくる考え方なのです。ここで重要なのは、第二のタイプ、つまり、知らず知らずのうちに学校に入り込んでくる隠れたカリキュラムです。というのも、この第二のタイプの隠れたカリキュラムによって、あたりまえだと思っていることが、あたりまえのまま疑われなくなる⁽²⁾ことがあるからです。

男女の区別にしても、年齢による区別にしても、慣れてしまえばあたりまえに思える区別です。では、男子と女子の区別にしても、ほかのやり方はないのでしょうか。年齢ごとの集団づくりにしても、違う学年をごちゃ混ぜにするやり方はできないのでしょうか。そう疑ってみると、どうしてもそうしなければならぬほどの必然性⁽³⁾があるとは限りま

せん。出欠をとるときに男女ませこぜで名前を呼んでも困らないはず。授業だって、塾や大学などでは、年齢にこだわらずにいっしょに勉強する集団がつくられることがあります。年齢よりどれだけの学力があるかを基準にクラスをつくってもよいのです。

日本という国や日本人という意識にしても、外国人の子どもが日本の学校にもっと増えていけば、どうなるでしょう。今までのように、日本という国のまとまりを前提に、日本語や日本の歴史、地理を中心に教える教育が望ましいかどうか、疑問が出てくることだってあるでしょう。実際に、いろいろな国から人びとが集まってできたアメリカやカナダのような国では、それぞれの人種や民族のトクチョウを学校でもっと勉強させようという主張があるくらいなのです。

このように、隠れたカリキュラムを通じて、私たちは、自分たちのまわりの世界を、どのように区別するのかわからず知らずのうちに身につけていきます。男と女の違いをどう見るか。そして、そういう区別のしかたが、私たちの行動や考え方にも反映するようになります。たとえば、「男だから〇〇すべきだ」「女のくせに〇〇するなんて」といった見方が自然に出てきたりするの、男と女という区別のしかたを知らず知らずのうちに身につけているからかもしれない。

年齢という区別のしかたも同じです。年齢が一歳違うだけで、先輩と後輩の区別がつけられたりするの、学年という区別のしかたが学校の中でごく自然に行われていることと関係しています。そして、こういう年齢という区別を気にしながら、社会人になっても、会社の中でだれが先輩かとか、だれが同期だとかいったように、人との関係の取り方が違ってきたりするのです。

さらには、日本という国のまとまりや日本人と外国人といった区別のしかたにしても、そういう区別のしかたを、知らず知らずのうちに身につけていることがキソ^(e)にあるのです。自分は日本人だという意識をもとに、他の国のできこ

とや他の国の人とつきあっていくのか、それとも、そういう日本人という意識を離れて、自分個人としてつきあっていくのか。こういう違いも、日本というまとまりをどのように区別しているかに関係しています。そして、こういう「日本人としての自分」という意識のものが、学校での隠れたカリキュラムなどを通じてつくられ、強化されていくのです。

このように疑ってみると、知らず知らずに入り込む隠れたカリキュラムは、それが前提としているあたりまえのことを、より強化しているといえます。ほかのやり方の可能性があることさえ、気づかないようにさせてしまう。たとえば、男女という区別を取り払ってみたり、年齢という区別を取り払ってみたり、どの国の人であるかという区別を取り払ってみたり、そうしたときに、私たちは、どのような新しい関係を築き上げることができるのか（こうしたことは、日本の社会でなぜ男女の平等がもつと進まないのかとか、日本で生まれた外国籍の人が国や地方の議員になれないのはなぜか、といった問題にもつながっています）。ところが、⁽⁴⁾ こういう想像がはたらかなくなるようにする力を、隠れたカリキュラムはもっているのです。

学校というところは、秩序を重んじる場所です。秩序というのは、まずは、自分たちのまわりの世界をどのように区別し、そうやって区別された人やモノやことがらを、どのように関係づけるかによって成り立っています。□カ、区別のしかたを変えてみるだけで、自分と世界との関係も変わってくるのです。こういう秩序のでき方や、私たちの社会の組み立て方ということにも、隠れたカリキュラムは関係しています。ですから、隠れたカリキュラムを発見することは、このような、私たちと世界との関係のあり方が、知らず知らずのうちに、どのように維持されているのかに目を向けることになるのです。

（荊谷剛彦『隠れたカリキュラム』による）

問1 傍線部(a)～(e)の片仮名を漢字に直しなさい。

問2 以下の一文を挿入するのに最も適切な箇所は本文中の空欄ア～オのうちどこか、記号で答えなさい。

いいかえれば、人間は「発達」するのだという意識を身につけているのです。

問3 空欄カに当てはまる語句として最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ もしくは ウ しかるに エ ですから オ 一方で

問4 傍線部(1)とあるが、「社会科や国語の授業」に含まれる「隠れたカリキュラム」の内容を三十字以内で答えなさい。

問5 傍線部(2)「第二のタイプの隠れたカリキュラム」が含まれる具体例として適切なものを次のア～オから二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。(順不同)

ア 学生が学校に登校する際の交通マナーを、教員が指導する。

イ 学校の設備・備品は大切に扱い、使用後は所定の位置に戻す。

ウ 男子トイレのマークを青色で、女子トイレのマークを赤色で示す。

エ クラスの学生全員に係を割り当て、それぞれに役割を担わせる。

オ 高学年から低学年へという順番でロッカーや靴箱を並べる。

問6 傍線部(3)「必然」の対義語として最も適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本然 イ 当然 ウ 暗然 エ 蓋然 オ 依然

問7 傍線部(4)とあるが、これを具体的に言い表した箇所を、本文中から三十字程度で抜き出して答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ことばは世界への窓である。私たちは日々の生活の中で、特に意識することなく、ことばを通して世界を見たり、ものごとを考えたりしている。あらためて、ことばが私たちの日常にどのような役割を果たしているのか、ことばがない世界とはどのようなものなのか、などと考えることはめったにあるまい。〔A〕、ことばは私たちの世界の見方、認識の仕方と、一体どのようなかわりを持っているのだろうか。

〔B〕、私たちは、「水」がどのようなものか知っている。では、「水」⁽¹⁾ということばを知るようになる以前の小さな子どもは、「水」を大人のように理解していないのだろうか。「緑」という色は、どうだろう。「緑」ということばを知らない子どもは、「緑」という色を大人と同じようには理解していないのだろうか。「左」ということばをまだ知らない子どもは、モノ同士の位置関係を大人と同じようには理解していないのだろうか。

同じ問いを次のように言い換えることもできる。「左」ということばを持たない言語——実際にあるのだが——を話す人たちは、私たちが「ほら、鍵はテレビの左側にあるよ」と言いたい状況で、どのようにその情報を伝えるのだろうか。そして、そもそもそのような言語を母語とする人たちは、モノ同士の位置関係についての理解の仕方や、自分の行く場所を探したり、空間の中でモノを探したりする仕方が、私たちと違うのだろうか。「緑」に相当する語を持たない言語の話し手は、私たちが「緑」と呼ぶ色に対して私たちと違う認識をするのだろうか。

実際、日本語は私たちの日常の中にあまりにも深く入り込んでいて、「緑」や「左」ということばを持たない言語があることを想像するのは、そんなに容易ではない。〔C〕、現実には「緑」や「左」に対応することばを持たない言語がたくさん存在するのである。

三省堂の『言語学大辞典』では、世界には八〇〇〇以上の言語があるとしている。(ただし、どのような基準で言語

のバリエーションを同一言語の方言としたり、別の言語とみなしたりするかによって、この数字は大きく異なるはずである。(これまでの調査によれば、言語によることばの使い方、より正確には「ことばによる世界の切り分け方」は、にわかには想像できないほど多様であるという。どのくらい多様なのか、という話は後でもっと詳しくすると、その前に「ことばが世界を切り分ける」ということについて、もう少し説明しよう。

ことばというのは、世界をカテゴリーに分ける。(言語学では「範疇」^{はんちゆう}という用語を用いるが、本書では、より一般的な「カテゴリー」という語を使うことにする。とりあえずここでは、カテゴリーとは同じ種類のモノの集まりであると定義しておく。ただし「同じ種類」とは何かというのは、これまたたいへん難しい問題である。この問題については、本書の随所^(a)でこれから触れていく。) 例外は固有名詞で、固有名詞はカテゴリーではなく、個人、個体の名前である。

ここでちょっと寄り道をして、すべてのことばが固有名詞だったらどうなるのか、ということを考えてみよう。すると、「ネコ」とか「ウサギ」などのことばはなくなり、「ポチ」「たま」「ミケ」「タロー」など、一つひとつの個体を指すことばしか残らない。つまり、ネコの「ミケ」も、ウサギの「ミッフィー」もすべて同じようにあつかわれ、個体としての区別しなくなってしまうということなのだ。このような事態を考えると、カテゴリーを指すことば、つまり⁽²⁾

「ネコ」や「ウサギ」のようなことばがいかに大事であるかがわかる。

「ネコ」「ウサギ」「リンゴ」などのことばは「X」のモノの集まりであるカテゴリーを指す。個体の名前ではなく、カテゴリーの名前を持つことの利点はなにか。それは個体のレベルでの無数の特徴——例えば、この個体はしっぽがちよっと短い、毛にぶちがある、太っている、耳が片方たれている、などの特徴——で区別するのではなく、無限に存在する個体を意味があるまとまりとしてまとめ、「同じモノ」に共通の特徴のみを問題にして、世界を整理していけることである。

D、「カテゴリー」というと、一般的には「モノのカテゴリー」のことだけを考えがちである。しかし、ことば

が指し示すカテゴリーはモノに限らない。例えば、人が行う動作は無限にある。その中で、私たちは「走る」、「歩く」、「跳ぶ」^(b)、「運ぶ」^(c)、「担ぐ」、「置く」、「入れる」など、さまざまな動作がある意味の基準に従ってくり、カテゴリーをつくって、それに「Y」というラベルをつけているのだ。つまり、様々な状況で行われる、無限に存在する動作を、「Y」によってカテゴリー化し、整理しているわけである。

「E」、モノとモノとの空間の位置関係を、ことばがどのように表現するか、あらためて考えてみよう。ここでもまた、無限に存在するモノ同士の空間上の位置関係を、ことばがカテゴリーにまとめ、整理しているということがわかる。

モノAがモノBの「前にある」「後ろにある」「横にある」「左(右)にある」「上にある」「下にある」「中にある」などの表現を考えてみよう。ここにおいて、モノA、モノBは何でもよい。人でも、動物でも、家具でも、道具でもかまわない。二つのモノが置かれている場所も、どこでもよい。前記の表現では、二つのモノの間の距離も関係ない。つまり、言語は三次元空間上に無限に存在する二つのモノの位置関係を、非常に限られた数の「位置関係のカテゴリー」に区分けし、整理しているのである。

ここで素朴な疑問がわいてくる。私たちが「見ている」世界は、ことばが切り分ける世界そのものなのだろうか。それとも、ことばが切り分ける世界は、私たちが「見ている」世界とは別のものなのだろうか。これは考えてみると、なかなか深い問題である。

世界には非常に多数の言語があり、世界をどのように切り分けていくかは、言語によって大きく異なる。もし私たちがことばを通して世界を「見ている」とすれば——つまり、私たちが見ている世界が、ことばが切り分けている世界そのものであるのなら——、異なる言語を話す人たちは、世界の見方や思考のあり方がずいぶん(あるいはまったく)異なるはずだ。

ところで、「思考」ということばを出したので、キーワードとなる「思考」と「認識」ということばが何を指すのかを、最初にはつきりさせておいたほうがよいかもしれない。心理学や認知科学、脳科学など、人の心の働きを明らかにしようとする研究で、もつともよく使われることばは「思考」と「認識」である。しかし、一方でこれらのことばほど、人によって捉え方が異なる語もない。

読者の多くは「思考」ということばを聞くと、じつくりと思索、^(e)熟慮することと思うのではないだろうか。「思索」に近いイメージかもしれない。しかし、心理学で「思考」というと、それよりもかなり広い意味で用いられる。心理学では、「思考」はしばしば人が心の中で(つまり脳で)行う認知活動すべてを指すのだ。自動販売機の前で、A社の缶コーヒーとB社の缶コーヒーのどちらを買うか決めることは、立派な「思考」である。このように、心理学ではこのような意識を伴った認知プロセスのみでなく、モノや、あるいは目の前で起こっていることを見る、見たものを理解する、理解したものを記憶する、という、人が無意識に行っている「認識」行為をも含めて、⁽³⁾包括的に「思考」と呼ぶのである。この捉え方をすると、ことばを話し始める前の乳児も、ことばを持たないヒト以外の動物も、立派に「思考」することになる。

「認識」ということばは、「思考」よりも専門的な響きがあるかもしれない。「認識する」という動詞を英語に訳すと、文脈によって know, realize, recognize, perceive, construe, appreciate といった語が対応する。これをさらに日本語に戻すと「知る」「悟る」「気づく」「知覚する」「解釈する」「理解する」などのことばに訳される。これらは一見ちがう意味を持つことばのようだが、人が無意識に日常生活の中でしていること——目で見て、耳で聞いて、手で触れて、それを記憶し、それを思い出す、という一連のプロセス——の中では、ほぼ同義なのである。ア

例えば、あなたがコーヒーを入れるため、自分のカップ(マイカップ)を探しているとしよう。食器棚を開けてみると、いろいろな食器が入っていて、その中にカップが何個かある。その中の一つがあなたのカップで、それを見つけ、

手に取る。このときあなたはカップというものがどういふものか知っており、さらに自分のカップがどういふものかも知っていると行ってよい。記憶の中に、その情報はある。 [イ]

一方、あなたは今、食器棚に納まっているモノを一つひとつ「見る」。「見る」と同時に、あるものはカップで、あるものは皿、あるものはボウルであることがわかる。つまり食器棚の中にあなたが見たモノを、カップ、皿、ボウルとして「認識」するわけである。あなたはさらに、自分の探しているカップを、他のカップと同じカップとして認識しながらも、他のカップと区別して「マイカップ」として認識するのである。

ウインドウショッピングをしていて、ガラス越しにはじめて見たモノを、その姿かたちから「かばん」と認識したり、「帽子」と認識したりする。そのモノ自体ははじめて見たモノで、記憶になくても、記憶にあるひな型によって、新しいモノを「かばん」「帽子」「カップ」「皿」などと認識する。 [ウ]

「それが何かわかる」というときの「何か」とは、モノが何であるかがわかるといふことに限られるわけではない。例えば、ある皿は「赤い」とわかる、あるボウルは「黄色」とわかる、マイカップは「緑色」だとわかる。さらに、カップや皿は食器棚の「中段にある」ことがわかり、カップは食器の「左側」に置いてあることがわかる。 [エ] マイカップはカップ類の「左端」に置いてあることがわかる。これらはみな「認識」と呼ばれるものである。 [オ]

認識の範囲は、もちろん目で見たものに限らない。音が何の音であるかわかる、手触りが何の手触りかわかる、というのも認識である。さらに、直接、感覚的に知覚できるものだけが認識の範囲でもない。あることの善悪がわかる、ということとは善悪の判断がつく、ということだ。ここまで来ると、「認識」と「思考」はかなり重なってくる。「認識する」は「思考する」に包含されるだろう。ただ、「認識」と「思考」の境界はそんなに明らかではない。

(今井むつみ『ことばと思考』による)

問1 傍線部(a)～(e)の漢字を平仮名に直しなさい。

問2 空欄 [A] [E] に入る最も適切な語句を次のア～キの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同一の記号は一度しか使えないものとする。

ア しかし イ さて ウ つまり エ また オ 次に カ だが キ 例えば

問3 空欄 [X]・[Y] に入る適切な語句を答えなさい。 [X] は本文中より四字で抜き出し、 [Y] は品詞名を漢字二字で書きなさい。

問4 以下の一文を挿入するのに最も適切な箇所は本文中の空欄ア～オのうちどこか、記号で答えなさい。

つまり日常的には、『見る』ということは『それが何かわかる』、つまり認識する、ということと同義なのである。

問5 傍線部(1)『水』ということばを知るようになる以前の小さな子どもは、『水』を大人のようにには理解していないのだろうか」とあるが、筆者はこのことについて、一つの見解を示している。それを本文中の言葉を用い、二十五字以上三十五字以内で答えなさい。

問6 傍線部(2)「カテゴリーを指すことば、つまり『ネコ』や『ウサギ』のようなことばがいかに大事であるかがわかる」とあるが、その理由となる箇所を本文中より、五十字以上六十字以内で抜き出し、「くから」に続くように答えなさい。

問7 傍線部(3)「『認識』行為をも含めて、包括的に『思考』と呼ぶのである」とあるが、これを端的に別の表現で言い表している一文を、そのまま抜き出して答えなさい。

以下余白

